

横芝の碑

(その五十四)

善女の信仰を集める石仏 姥山三十三所観音

姥山地区ではお産で死んだ人がいない、ということ。八十才位になる人に聞いて見しても、私等のおふくろがそう言っていたから随分昔からだろう」と言っています。それは、姥山に古くから祭られている三十三所観音の霊験だと伝えられています。

姥山地区青年館のすぐ近くに放光院という寺があります。今は境内が遊園地になっていたり、お堂も集会所風で、昔の面影は残っていませんが、周囲の石塔等は、何となく昔を語っている様です。

扱て、姥山三十三所観音は、この寺の裏山にあつて、毎年、春四月ともなりますと、参詣巡礼の善男善女が沢山訪れ、謂所観音詣りの行列が続いたそうです。姥山の人々は、寺の境内に筵等を敷き、煮粥や、握飯、漬物等を持ちよつてもてなし、また、巡拝路の手入れ等も行っていたそうです。これは、総て女の人達の仕事として引つがれてきましたが、其後いろいろな事情から、次第に参詣者も少なくなり、接待の風習も何時か途絶えて終わりました。しかし、巡拝

路や石仏の手入れは、今でも残っていて、毎年、春秋のお彼岸頃には、誰からともなく誘い合った女の人達が集り、参詣路の手入れや石仏の周辺の草や笹等を刈ったり、倒れかけている石仏を建て直したりしている、ということ。この作業には、一軒の家で、一番新しい主婦が参加する慣習で、新しい主婦が出来るまでは、六十才でも七十才でも参加する、という話です。

放光院の裏山の急坂を上りますと、細い山路が二つに岐れます。

これを左に曲りますと、其処に建っているのが一番観音です。これから羊腸の小路が山合を縫う様に続き、その路傍に三十三体の観音像が点在しているのです。

三十三所観音は、華山天皇が退位された寛和二年(九八六)に僧仏眼の勧請によつて西国三十三所の観音霊迹を巡礼されたのが始めである、と伝えられています。その後、阪東周辺、秩父、他にも三十三所観音霊場が開基されましたが、主として前記の三所を、俗に百観音と称しています。江戸時

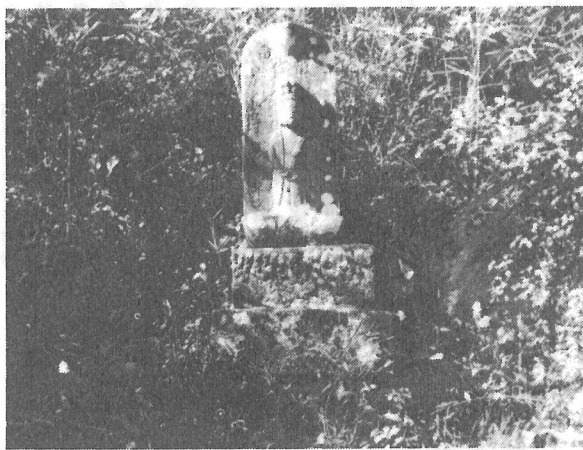
代になってから、秩父三十三観音は一寺を加えて三十四所観音として、実数百観音に合せたのだそう。その後、更にこの主霊場を写した三十三所観音が各所に創建されました。古老の話によりますと、芝山観音教寺の三十三所観音は、姥山の観音様に詣つた信者が「芝山にも」と話し合つて建てたものだ、ということ。芝山の三十三所観音の創設は大正年間であり、姥山の三十三所観音に刻まれている宝暦年間(一七五二―一七六四)に比べて遙かに新しいことや、寄進者の中に同じ地域の人があること等を考え合せますと、古老の話が領ける様に思われます。姥山三十三所観音の開基の時代

は詳かではありませんが、前述してあります通り、石像に刻まれている年号に、宝暦(一七五二―一七六四)・天明(一七八一―一七八九)とありますし、又寄進者の住所も、長倉村、遠山村、深草村、川崎村、米倉村等とありますので、少くとも二百二十年より前の開基であり、しかも、相当遠い所にも信者が居たことが推察できます。尚、姥山村については、総て当村と表現されていますので、姥山の人達の先達で勧進創設されたことも窺われます。

写真は、三十三所観音の一基で観音立像と、先祖代々 当村四郎兵衛等と刻まれています。芝山の三十三所観音は、阪東三十三所を模した寺名が刻まれています。この三十三所観音には寺院名が刻まれていません。それでも、古老の話もあり、阪東三十三所観音の中には、東京の浅草寺、日光の中善寺、香取郡の竜正院(二十八番)海上郡の円福寺(二十七番)等、身近の寺が多いので、阪東三十三所観音を写したものと考えてよいのではないのでしょうか。

本稿取材に当り、姥山区長伊藤勝衛氏御一家等の御協力を戴きました。尚、戴いた資料の中、紙面の都合で一部を割愛させて頂きました。お詫びを兼ねお断り致します。

(町文化財審議会委員
小沢春光氏寄稿)



姥山三十三所観音霊場案内略図

